

沖縄の格子状集落に関する予察的考察

高 橋 誠 一

一 沖縄の集落形態に関する既往研究

沖縄の農村集落に、長方形もしくは正方形に近い道路の区画が顕著に認められることは、早くから指摘されてきたが、第二次世界大戦前に発表された高原三郎氏の「沖縄縣下の聚落」をもって、その嚆矢とすることができるといえる。氏は、まず『琉球国由来記』（一七一三年）・『琉球藩管内戸籍統計』（一八七七年）に見える村落と一九三七年現在の村落を対象として、新村と古村に分類した上で、それらの集落形態は、散村と集村に大別することができ、集村はさらに「計画的碁盤目型」のものと「然らざるもの」とに細分されたとした。原則として散村は新村であり、集村は古村であること、また古村は共同社会的であるが新村はそうではないことなどを指摘し、計画的碁盤目型の集落として、島尻郡具志川村（久米島）島島、国頭郡久志村汀良、八重山郡大浜村平得、中頭郡具志川村上江州、宮古郡平良町の五例が提示された。これらは、タウンシップの流れを汲む北海道の集落や「古代帝都」あるいは「条里式集落」とは別系統のものとされ、「南島式村落」と命名された。さらに、久米島島島は明治三六（一九〇三）年の硫黄島爆発の際に移住した集落であること、上江州は一九世紀中葉に亀山なる三世相の指導下に成立したことを述べ、これに対して久志村汀良と大浜村平得はその文意からすれば成立は古いと考えたようである。また、宮古郡平良町の例は市街地の一部であるが、これもまた計画的碁盤目型であるとされている。高原氏の論考はいずれも簡潔な記述であるために、その詳細は明確ではないが、

「碁盤目型」、「格子状」、「直交式」の道路網をもち、道路間の間隔や距離あるいは幅には多少の差があるものの一定の傾向があるとされ、「其多くは何時の時代にか誰かが計画的に建設したものと考へられる」とされ、また正方形もしくは矩形の区画と、宅地の広さ（八十坪ないし二百坪）、二、五戸と横に並ぶか数戸ないし十数戸が集まって矩形の屋敷地ブロックをなすなどの著しい均一性を有していることを指摘している⁽¹⁾。

また仲松弥秀氏は、「自然（的）発達型」はほとんどが御嶽に接し「不井然的形態」を呈していて、その発生は古く村落発生当時から位置を守ってきたものが多く、これに対して、「計画（的発達）型」は、可能な限り「ゴバン型」をなしているとされる。この計画型は王府によって実施されたものと、王府の役人や地理師の指導を受けたと思われるが村人によって建設されたものとの二通りがある。このうち、八重山・宮古のゴバン型のほとんどは王府によったものが占めていると考えられる。この場合は、付近に散在していたいくつかの小村落を王府の支配に都合のよいように集居させる際に、ゴバン型をとったもので、慶長検地の結果それ以後のことと考えられている。ただしその中には明和八（二七七二）年の大津波後に再建されたものや、マラリア地帯開拓を目指した強制移民村も含まれている。一方、沖縄本島やその周辺の島々のゴバン型村落は、王府役人や地理師の指導を受けて村人が建設したものが普遍的であるとされ、土地の公有に基づく地割制度に端を発していると考えられる。この制度は蔡温執政時に始まったとされるが、最初は模合持土地制度であったが結果が思わしくないことから、明治三六年まで続いた地割制に改めたもので、元文二（一七三七）年から実施されたと考えられる。この制度は当然土地統制につながるわけで、したがってその後の村の分家拡張や村落移動の場合においては、計画的屋敷配分、それも区画するのに容易なゴバン型が地形の許す限り採用された。したがって全村移動型のもは村落全体がゴバン型をなし、地割制以後に分家拡張された村落の場合は、不井然型にゴバン型が付着した、いわゆる併存型形態の村が形成されることになった。ここでいわれる沖縄のゴバン型は、すでに高原三郎氏のいう計画的碁盤型と基本的には同じものを指すといつてよいと思われるが、その建設をより具体的に論じている点で、一層高く評価されるべきものである。ただ両氏の「計画的碁盤目型」もしくは「ゴバン型」は、あくまでも単な

る形態上の表現であつて、その規模や規格性などについての詳細は論じられていないといわざるを得ない。⁽²⁾

一方、田里友哲氏は、沖縄の集落について、「近世以前の古琉球に成立起源をもつ集落」を「在来伝統の古村」、「近世及び以後に成立起源をもつ集落」を「開拓新村」または「新村」と呼称した。これらの古村と新村は、『琉球国由来記』・『琉球国旧記』（一七三一年）に記載されているか否かによつて分別されるが、新村のうちでも特に沖縄本島の屋取集落・宮古諸島の添集落、八重山諸島の強制移住集落を対象とした調査をすすめた。田里氏による一連の研究は、『球陽』に見られる村落移動や風水説との関連にも論及している点、またその著作に屋取集落の基礎資料として沖縄における村落の新旧対照表が附されている点など、きわめて重要な研究である。しかし、残念ながら本稿で対象とする計画的基盤目型の集落についての議論は、さほどなされていない。⁽³⁾

沖縄の古村と新村という点では、一九九三年から実施された国立歴史民俗博物館の調査・研究も、史資料の分析や発掘調査を踏まえて、多くの新知見を提示したのとして注目すべきである。これらは、主として先島の村落遺跡を対象としたもので、新たな村落が建設された結果、以前の防御された村落が廃村となり聖地化されていた実態や、平地の村における首長屋敷の御嶽化の過程などを追及したもので、新村建設以前の村落遺跡を解明している点で、貴重な研究である。ただ、この調査・研究の主眼が、村落遺跡（古村）や御嶽あるいは井戸・屋敷などにおかれているために、計画的基盤目型もしくはゴバン型の集落プランに関しては、さほどの考察はなされていない。⁽⁴⁾

一方、坂本磐雄氏は、沖縄の民家研究においては、主屋の向き、家屋配置、主屋一番座の位置、門の位置が、その基底要素として重要であるとして、さらに宅地割と宅地ブロックの集合についての研究も必要であると述べる。このような観点からなされた坂本氏の沖縄の集落景観に関する研究は、詳細な現地調査に基づいたものであつて、まさに歴史的な意味を有する研究であるといひ得る。一九七三年から一九八八年までの十数年間におよぶ現地調査は、一一九集落（沖縄の農村集落の約二六％）で実施されたが、道路配置および宅地割が規則性的で計画的なものが多く、計画的集落の宅地割のほとんどは「横一列型」であることが特徴的であるとされる。この「横一列型」に属するものは、二三〇集

落のうち二一五集落の九五%も占めており、その普及の要因は、門の位置と住宅の表座側を互いに向かい合うようにすることの欲求、要するに正面入り志向が強いことに求められている。また「横一列型」の採用時期として、一七三六年に現在地に移転してきた沖縄本島の玉城村前川をあげ、不規則な部分は一七三六年につくられているが、その他の規則的な部分は一七三七年以降につくられているとの仲松弥秀氏の指摘をも援用して、「横一列型」だけから成る最初の集落は一七三七年に造成された玉城村前川であると結論づけている。

『沖縄の集落景観』に収録された豊富な図面によっても裏付けられた氏の業績は、沖縄の集落研究におけるまさに金字塔と表現すべきものである。しかし、沖縄の格子状集落の規則性ないし計画性を議論する場合、どうしてもその規格性、すなわち具体的には道路間の距離や各ブロックの規模を検討する必要がある。この点、坂本氏の業績にはいささかの瑕疵があるといわざるを得ない。『沖縄の集落景観』には沖縄の農村集落について、六〇数葉の集落全体を示した集落構成図・家屋配置図などが収録されているが、そのいずれにも縮尺が記入されていない。それゆえ、例えば「横一列型」にしても、個々の宅地の形態や面積に関する検討はなされているものの、宅地ブロックが規模の点で共通性を有しているのか否かという検討にまでは及んでいないのである。これは坂本氏自らが「あとがき」で述懐するように「一九七五年には、最も大変だった家屋配置を実測から目測に切り替えて」調査の進展が図られたことと、おそらくは調査当時には大縮尺の正確な地図の刊行が限定されていたことに帰せられると想像される。したがってこの瑕疵は、非難されるべきものではなく、提示された図からもその計画性の存在は理解できるわけで、本質的な点における疑問が生じるわけでもない。しかし地理学の立場からすれば、やはり重要な要素が欠如しているといわざるを得ないのである。⁽⁵⁾

そして、この点にこそ、従来から指摘されてきた沖縄の計画的碁盤目型の集落に関する研究上の余地があるように思われる。すなわち、計画的と表現されつつも、これまでの研究では、その具体的な規格性と共通性は、高原氏以外の論文では、それほど議論されてこなかった。強いて言うならば、論じられてきたその形態研究には、規模や尺度の共通性や規格性の有無の検討が欠如していた。また、その用語についても、計画的碁盤目型、ゴバン型、格子状、直交式、南

島式村落などが使用されていて、必ずしも統一的な表現がなされているわけではない。これらの表現が誤っているわけではないが、「計画的」とは言いつつも、どのような計画的統一性が存在したのかという事実は解明されていない。また碁盤目（ゴバン）型という表現には正方形という意味が含まれるわけで、沖縄の集落が果たして古代日本の平安京条坊制のような正方形プランであるかと言えば、必ずしもそうではない。歪んだ正方形や長方形、厳密には彎曲道路などもあって、その全てが直交しているわけではない。したがって、碁盤目や計画的という表現上の枠を脱して検討するために、その実態に最も適当と考えられる「格子状集落」という表現を採用した上で、具体的な考察に入りたい。

二 二五〇〇〇分の一地形図による検討

沖縄の農村集落の数は、時代によって、また依拠資料や集計者によって、相当の異同がある。たとえば、高原三郎氏の集計では、一七一三年では四八二村、一八七七年には五八八村、一九三七年には九三二村という数値が示される。⁽⁶⁾また仲松弥秀氏は、慶長検地頃と推定される『琉球国高究帳』と『宮古八重山両嶋絵図帳』から算出される「平民百姓村」は四五四村、廃藩置県当時の村数は東恩納寛惇氏『風土記』によれば五八九村、一九七二年当時の琉球政府による統計では六七八村という数値を示している。⁽⁷⁾さらに坂本磐雄氏による四六五の農村集落という数値も参考にすることができる。⁽⁸⁾

このような多数の集落の形態の概要を把握するために、まず国土地理院発行の二五〇〇〇分の一地形図によって、格子状の道路形態を有している集落を抽出してみた。第1図〜第3図がそれである。地形図は、二〇〇一年の時点で最も新しいものを使用しているために、ここで抽出しているものは、あくまでも現時点のものであり、歴史的集落とは必ずしも一致しない。したがって、図中に示した格子状集落には、新しい市街地も含まれていると思われる。個別的に確認したわけではないが、周辺の状況からみて、最近に市街地化した例と想定できるものについては、一応、「？」を付しておくにとどめた。

三葉の図によって、その概要を述べれば、以下のようになる。まず、沖縄本島では、六九（？が七）、沖縄本島周辺

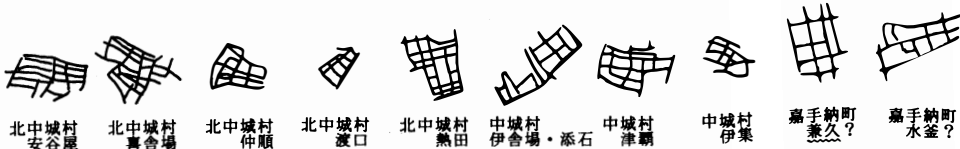
国頭郡



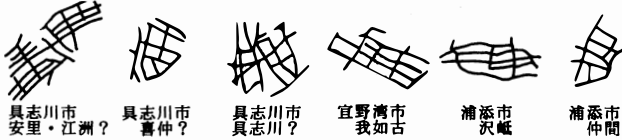
名護市



中頭郡



具志川市

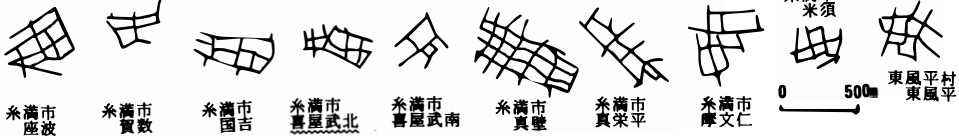


宜野湾市 浦添市

島尻郡



糸満市



島尻郡



第1図 1: 25000 地形図からみた沖縄本島の格子状集落

伊平屋島 伊是名島



伊平屋村
田名



伊是名村
勢理客



伊是名村
緒見



伊是名村
仲田



伊是名村
伊是名

屋我地島



名護市
我部



名護市
磯平名



名護市
浜井出

伊江島



伊江村
西江前



伊江村
下原



伊江村
川平



伊江村
東江前



伊江村
並里

古宇利島



今帰仁村
村内

瀬底島



本部町
瀬底

平安座島



与那城町
平安座

宮城島



与那城町
桃原

伊計島



与那城町
伊計

浜比嘉島



勝連町
浜

南大東島



南大東村
在所

栗国島



栗国村
東・西



栗国村
浜

渡嘉敷島



渡嘉敷村
渡嘉敷



渡嘉敷村
阿波連

座間味島



座間味村
座間味



座間味村
阿嘉

慶留間島



座間味村
慶留間

波名喜島



波名喜村
西・南

久米島



具志川村
仲村渠



具志川村
仲地



具志川村
久間地



具志川村
西銘



具志川村
島尻



具志川村
仲泊



具志川村
兼城



具志川村
重手刈



仲里村
儀間



仲里村
真謝・宇根



仲里村
比嘉



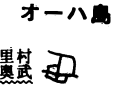
仲里村
謝名堂



仲里村
島尻



仲里村
東奥武

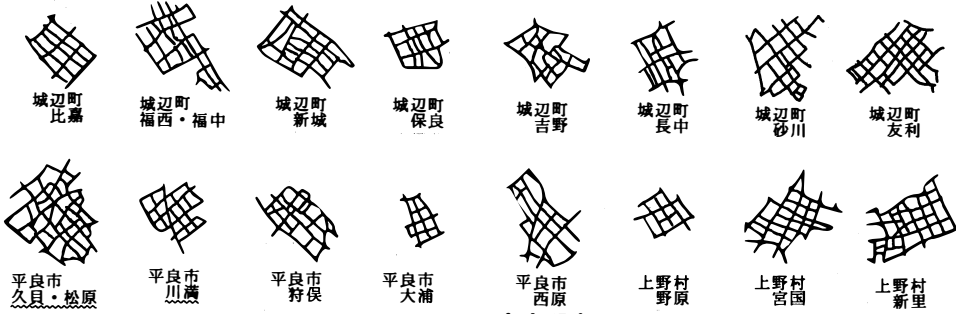


オーハ島

0 500m

第2図 1:25000 地形図からみた沖縄本島周辺の島嶼部の格子状集落

宮古島



多良間島



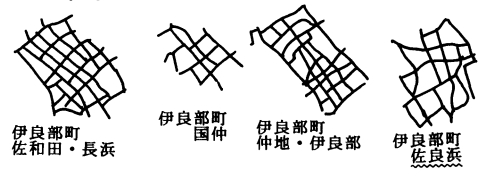
来間島



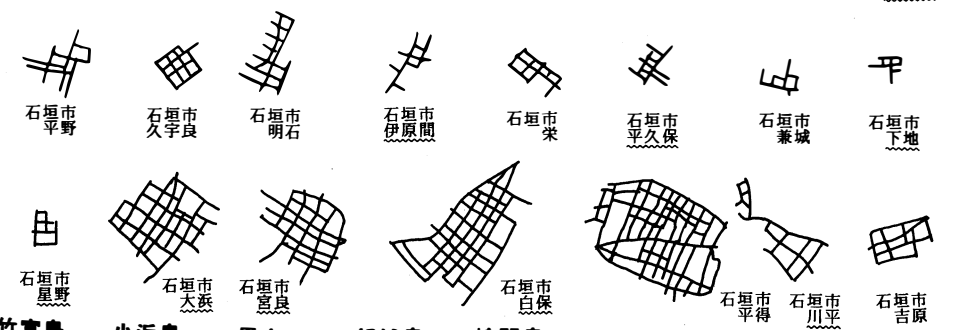
池間島



伊良部島



石垣島



竹富島



小浜島



黒島



新城島



鳩間島



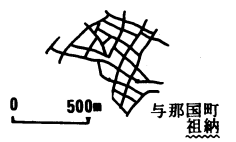
波照間島



西表島



与那国島



第3図 1:25000 地形図からみた宮古・八重山の格子状集落

の島嶼部では四二、宮古・八重山では五六の事例が浮かび上がってくる。言うまでもなく、これはあくまでも二五〇〇分の一地形図から摘出した例でしかないが、？を付した例を除いても、その数が一六〇例にも及ぶ事実は、きわめて重要であるように思われる。仮に近世の村落を四五〇とすれば、実にその約三六％が格子状集落であったと言っても大過ないであろう。また一六〇例のうち、海岸線に接している例（波線を付した例）は、沖縄本島では二二例（約三四％）、沖縄本島周辺の島嶼部では二三例（約五五％）、宮古・八重山では一九例（約三四％）である。

格子状の道路の方位に関しては、統一性はないように思われる。たとえば南北軸に近い道路をとって見ても、西に傾いているものと東に傾いているものが、数的にはほぼ拮抗していて、さしたる特異性は認められない。南北軸が西もしくは東寄りへ傾斜していることは、各地域における台風時の卓越風向に対応している可能性が考えられるが、このことに関しては現段階では定かではない。ただし、正東西南北にごく近い例は、石垣市下地や石垣市星野の小規模なものを除いてほぼ皆無といってよいことは注目される。少なくとも古代日本の条坊制や多くの条里制の方位とは明確に異なっている。また、これらの例を見る限り、格子状の道路は、集落周辺の農地にまで及ぶものではなかったと考えられる。したがって、条里制のような土地制度ではなく、あくまでも集落の内部にとどまるものであった可能性が高い。

さらに、これらの格子状集落の道路間隔には、ある種の規格性が存在するように思われる。もとより二五〇〇分の一地形図上でのことであるから、想定の域を出るものではないが、地形図上で計測すれば、三、六、九ミリメートルの道路間隔が卓越しているように思われる。この数値は単純に計算すれば、七五、一五〇、二二五メートルで、後述する粟国島で述べる一町を三等分した長さの三六メートル余の区画や一町すなわち約一一〇メートルという数値が仮定できるとも考えられるのである。

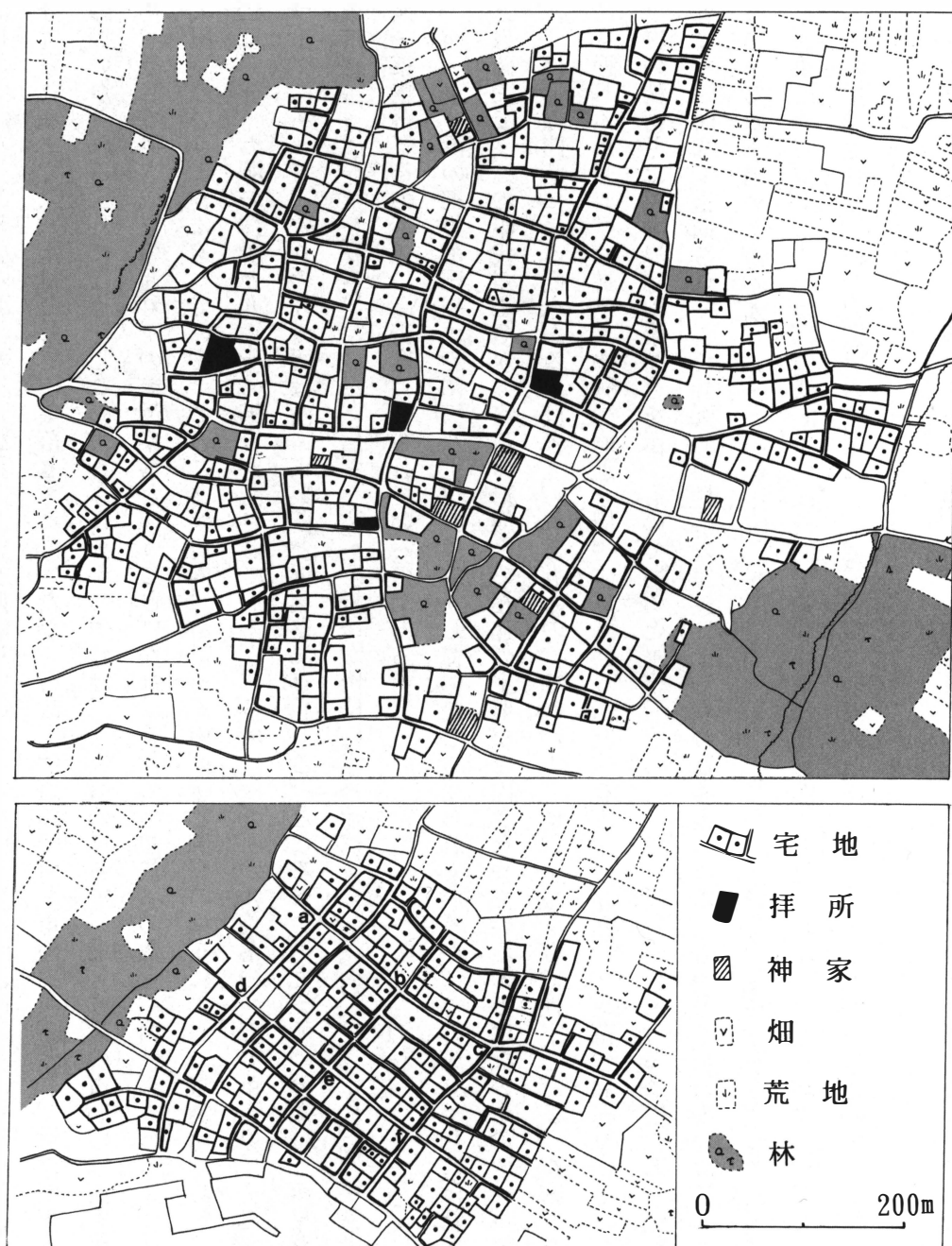
三 粟国島の事例

そこで、よりミクロなスケールによる分析として、粟国島（島尻郡粟国村）の事例をとりあげたい。ここで取り上げ

栗国島の格子状集落は、先に二五〇〇分の一地形図でみた格子状集落の中では、最も大規模な格子状集落の一例である。栗国島には大別すると、西・東と浜の二集落が存在している（西・東は歴史的にも、また現在でも行政的には二地区として分別されてはいるものの、その景観上の連続性から見ると、ひとまとまりの集落として考えるのが適當であろう）。注目すべきは、そのいずれもが、格子状のプランを有していることである。しかし、前記の高原論文の付図では、栗国島には四集落が記されているが、いずれも「南島式村落」に対して「然ラザル集村」と分類されていて、いわゆる計画的碁盤目型とは認定されていない⁽⁹⁾。また、坂本氏の調査では、栗国島は二集落で、不規則的宅地割とされている⁽¹⁰⁾。しかし前章で示したように二五〇〇分の一地形図によっても、栗国島には、格子状の区画が認められるのである。

この点を確認するために、栗国村役場発行の五〇〇〇分の一地形図と、栗国村役場作成の「村の空屋の状況」図によって、その集落形態を検討した。そのために作製したのが、第4図である⁽¹¹⁾。この図によれば、西・東集落と浜集落は、明らかに格子状の形態を有していることがわかる。しかし、その形態は、同じ格子状とはいえ、大きく異なっている。すなわち西・東集落が基本的には彎曲した道路によって不整形な格子状形態を成しているのに対して、浜集落の場合は、一部に彎曲道路が認められるものの、その多くは直線道路であって、より整然たる方格地割であり、ある種の規格性が存在していると考えられる。すなわち浜集落の場合は、例えば図の a—b—e—d、b—c—f—e のほぼ正方形の区画は、あくまでも図の上での計測であるが、一辺が約一一〇mで、これは一町区画と考えるのが妥当であろう。またその一町方格を三分の一の長方形に区画するという規格性も存在したように思われる。これに対して、西・東集落の場合には、集落の中心部に一町方格を想起させるようなブロックやその三分割という区画がうかがえはするものの、浜集落と比較すると明らかに不整形である。両者の相違は、何に拠ったものであろうか。

結論からいえば、西・東集落と浜集落の成立の年代差と成立の経緯によるものと考えたい。『栗国村誌』では、「尚敬王時代の元文二（一七三七）年の村落の新設という資料によると、泊渠が部落の発祥地と推察出来る。」とし、草戸原や島原から移動して泊村を構成し、現在の西集落から東集落に発展し、人口が次第に増加するに伴って浜集落に発展移



第4図 栗国島（島尻郡栗国村）の西・東集落（上図）と浜集落（下図）

住したのであることを「謝花歌謡」などによって推定している。また西・東は明治四一年島嶼町村制によって行政区が分けられるまでは八重村として一集落とされていたが、行政上は道路で西・東の二集落とし、浜は浜集落として三集落の扱いがされるようになった。このような経緯からすれば、三集落のうちで、最も成立の古いのは西集落、ついで東集落、そして最も成立の遅れたのが浜集落ということになり、歴代の地頭代屋の数も、西に五大屋、東に四大屋、浜に三大屋、というように違っている。このことは島内にある多くの拝所と御嶽の分布によっても裏付けられる。『粟国村誌』には、一カ所の拝所と九カ所の御嶽が記されているが、拝所は一カ所が西集落の西部の草戸原、また一カ所が東海岸ウীগにあつて、残りの九カ所は西・東集落と浜集落に存在する。ところがこの九カ所の分布は、西集落に五カ所、東集落に一カ所、浜集落に三カ所で、明らかに西集落が優位に立っていることがわかる。また御嶽も浜集落に比して、西・東集落とその近辺に高密度に分布しているのである。⁽¹²⁾

西・東・浜の三集落は、すでに一八世紀には成立していたと考えられているが、その成立年代には新旧の差があることも確実で、この年代差こそが二集落の形態上の相違の主要な要因となっているのではないか。西・東集落の彎曲道路は、地形の凹凸による面もあるとは考えられるものの、筆者がすでに首里城下町で推定したような円形もしくは楕円形にも通じる形態で、直進する悪気の直進を阻害するという伝統的な思想の存在や、集落の周縁や内部に多い林の存在と御嶽の稠密さは風水思想の濃厚さを示すものであると推定しうる。⁽¹³⁾ また、浜集落における整然たる規格性は、いわばこれまでの研究で指摘されてきた計画的な村落の建設によるものと考えられる。もっとも新村の建設に当たっては首里王府による風水師の指導があつたことが想定される以上、浜集落においても風水思想の影響を考えるべきではあるが、その建設の時点では、いわば旧態のかつ伝統的な強固な風水思想が稀釈化されていたと一応は考えておきたい。また坂本氏の指摘された「横一列型」の整備によつて、かつての彎曲道路による風水思想が希薄化していったことも想像できるのではないだろうか。

本稿で述べた粟国島の一例のみで、沖縄の格子状集落形態についての成立の経緯と要因を議論できないことは、言う

までもない。この点の解明には、史料や絵図の残る八重山諸島の事例を綿密に検討することが有効であろうと思われるが、今後の課題としたい。

〔注〕

- (1) 高原三郎「沖縄縣下の聚落」『地理學』第七卷第七號、古今書院、一九三九年六月、一一二～一一八頁。
- (2) 仲松弥秀「うるまの島の古層―琉球弧の村と民俗―」、梶社、一九九三年一〇月一日、一～三〇二頁。
- (3) 田里友哲「論集 沖縄の集落研究」、離宇宙社、一九八三年三月一〇日、一～三〇九頁。
- (4) 国立歴史民俗博物館編「村が語る沖縄の歴史」、新人物往來社、一九九九年五月三〇日、一～二五二頁。小野正敏「南方の島々」、小野正敏編「図解・日本の中世遺跡」（東京大学出版会、二〇〇一年三月二七日）所収、二一八～二三三頁。
- (5) 坂本磐雄「沖縄の集落景観」、九州大学出版会、一九八九年四月二〇日、一～三五八頁。坂本磐雄「沖縄の集落構成の特長」、『文明のクロスロード MUSEUM KYUSHU』第一〇巻第二号、博物館等建設推進九州会議、一九九一年三月三十一日、三四～三九頁。
- (6) 前掲注(1)
- (7) 前掲注(2)
- (8) 前掲注(5)
- (9) 前掲注(1)
- (10) 前掲注(5)
- (11) 五〇〇〇分の一地形図は国土基本図を複製したものと注記されている。作成年代は、二図ともに記されていない。「村の空屋の状況」図は、五〇〇〇分の一地形図を拡大した図に住宅や世帯主名などを記入した図で、役場の「人口及び世帯数」資料によれば、一九七二年二月には一六八七人・四八二世帯であったが、現在の人口数は約五〇％・世帯数は約八〇％に減少という過疎化に対応するために粟国村で作成されたものである。ただし第4図では空屋を区別せずに宅地として表現した。また「村の空屋の状況」図に拝所と神家が記されているが、後述の「粟国村誌」の数とは一致しない。
- (12) 粟国村村史編纂委員「粟国村誌」、粟国村、一九八四年四月一日。なお粟国島については、名嘉正八郎「粟国島略史」、沖縄県立博物館「総合調査報告―粟国島」、沖縄県立博物館、一九八〇年、一～七頁。上江洲均「粟国島のトゥーじ」、同、二一～二七頁。大城逸朗「粟国島の地形と地質」、同、三九～四五頁、沖縄県天然記念物調査シリーズ 第三九集「沖縄県地質・地物緊急事態調査報告書―沖縄県の地形・地質」、沖縄県教育委員会、賀納章雄「沖縄県渡名喜島・粟国島における伝統的作物キビの復活とその背景」、『人文地理』五二―一、二〇〇〇年二月二八日、六七～八三頁などの研究がある。また、現地での聞き取りによれば、西・東集落と浜集落の成立の新旧は、現在でも粟国村の人々に意識されている。西・東集落における御嶽の多さや伝統の古さ、あるいは少なくとも以前は優位性も認識されていたと言われる。なお、粟国村に関しては、粟国村教育委員会の新里親房氏や粟国村役場の各氏から、各種資料の提供をはじめとして多くの教示を得た。記して感謝したい。

(13)

拙稿「首里古地図」と首里城下町の復原」、「東西学術研究所紀要」第三輯、関西大学東西学術研究所、二〇〇〇年三月三十一日、七五―一〇七頁。「首里城下町の都市計画とその基本理念」、「東西学術研究所紀要」第三輯、関西大学東西学術研究所、二〇〇一年三月三十一日、一―三九頁。